

的に委託せられてあつた次第で、かなり主張に強い人々が、會議となれば群集心理の作用で一きは活きり立つのをそれらへ出来得る限り尊重して、適當なところに落ちつかせることに勉められた苦心は、察するに餘りがあつた。

かゝる次第で、この年十月の初頃には、一應學院や研究所の規定も打合せが出来上り、建築も昭和四・五兩年度中に完成させるといふところまで内議が定まつたので、こゝに東西の有志三十餘名が發起人の名を列して、東方文化學院設置の諒解を政府に求めることになつた。然もかやうにして内定した規定に對しても、京都ではこの月の末に發起人の一員の發議で、重ねて京都側の發起人會を開き、更めて研究費を増加し、研究の範圍を擴大し、建築についても、それが兩年度に亙るのは止むを得ないにしても、五年度の始めに完成してもよいことに改むべきであることを強く主張した。この一例によつても、當初内議を纏めるについて、如何に博士が苦心せられたかの一端を想像するに足るであらう。

かやうにして學院や研究所の設置の事は、關係者の間に於て下相談が出来上つてゐたので、政府の助成金交附もこの後間もなく認められることになり、取急いで昭和四年度の豫算と役員とを定める段取りとなつた。役員は學院の理事と研究所の評議員とで、評議員には東西それらの發起人が委嘱せられることになり、そして評議員の一人である狩野博士が京都研究所の主任に當られることになつたが、學院理事の選任については、最初のことでもあり、また東京側との關係もあり、博士の少からず苦慮せられたことであつたらうと思はれる。その間の事情については今に於ても關知しないが、昭和四年二月六日に、京都の研究所の最初の評議員會が開かれた席上、主任としての博士の外に、評議員中の年少であつた濱田君と自分とが、嫌應なしに理事を引受けさせられることになつた。或